おわりに

本稿では非行のなかでも窃盗と性非行について取り上げ、その背景に精神障害が関連しているケースがあることを示唆した。

しかし、障害のあるなしにかかわらず、全ての子どもたちに共通した特徴があるとすれば、子どもたちの底力の弱さである。仲間関係の希薄さ、ストレスへの脆弱さ、問題解決能力の低さなど、子どもたちの気になる点をあげればキリがないが、そうした難しい課題は成長とともに少しずつ克服していけばよい。なによりも今、子どもたちに必要とされるのは、その全ての土台となる安心感ではないかと考える。わたしたちはこれまでに子どもたちに何を与えてきたのか、もう一度振り返ってみるべきであろう。

SCT
(精研式 文章完成法テスト)
活用ガイド

伊藤隆一 編著

B5判上製／260頁
定価 本体6,800円+税

産業・心理臨床・福祉・教育の包括的手引

SCTの具体的で効果的な活用法、事例を紹介

投影法のアセスメントツールとして使用頻度の高いSCTの「企業・組織現場」と「教育・臨床現場」での具体的で効果的な活用法を、豊富な事例を用いて解説。

■主な内容
第Ⅰ部 SCTによるパーソナリティ把握技法
第Ⅱ部 企業・人事組織現場における活用(1) 横断的研究
第Ⅲ部 企業・人事組織現場における活用(2) ケース分析
第Ⅳ部 臨床・教育現場における活用(1) 横断的研究
第Ⅴ部 臨床・教育現場における活用(2) ケース分析
第Ⅵ部 臨床・教育現場における活用(3) 子どものケース分析

金子書房

子どもの行動の裏にある病理

学業不振の背景にあるもの

西南学院大学教授
こばやしりゅうじ 小林隆児

はじめに

子どもの精神医学の領域で、学業不振あるいは学習障碍なる病名がよく取り沙汰されたのは、筆者が児童精神科医になって間もない頃であった。その頃は、自閉症の言語認知障碍仮説が広がり始めていたため、発達障碍を言語認知障碍、学習障碍などの観点から捉えようとする動向が顕著になりつつあった時期であった。学習障碍という捉え方はしばらく話題になったが、間もなくするとさほど取り上げられなくなった。

当時、学習障碍と学業不振は異なったものとして、その差異が盛んに論じられたものである。学業不振は学業全般の低下が問題とされ、それはなんらかの知的障碍との関連で考えられていたが、学習障碍は知的障碍とは異なり、学習の特異な領域、たとえば読み、書き、計算などが選択的に困難となったものとして厳密に区別することが求められた。

現在、学習自体の問題が正面から取り上げられることはほとんどなくなってきたのはなぜか。学習や学業の問題を抱えている子どもで、純粋に学習の壁のみにぶち当たっていることはほとんどなく、実際にはそれまでの心の発達そのものになんらかの問題を抱えていることが大半であることがわかってきたからである。当時から一部の研究者が学習障碍とみなしていた子どもの大半は広汎性発達障碍（今でいう自閉症スペクトラム障碍）ではないかと言われたほどで、今振り返ると、「木を見て森を見ず」ということではなかったか。

心の発達になんらかの問題が生じれば、学業そのも

のにも影響を及ぼすことは当然考えられるわけで、ここで大切なことは、そもそも学習（学ぶ）という営みが好ましいかたちで蓄積されていくためにはどのような発達の蓄積が求められるのか、そのことを考えていくことである。

「学ぶ」ということを考える

「学ぶ」は「まねぶ」ということから派生してきたことからもわかるように、本来の学習の始まりは、手本となるものを「真似る」ことである。

その最初のかたちともいえるものが、乳児を前に養育者が微笑むと、乳児が思わず笑顔を見せる現象ではないか。社会的微笑（social smile）である。ここでは乳児が養育者の微笑みに引き込まれるようにして笑顔が誘発されているのであって、乳児自身が意図的に行っているものではないが、「真似る」ことの本質はこのような関係の中にうかがい知ることができる。そのことがより顕著になるのは、乳児が養育者に懐いて「甘える」ようになってからである。一歳もすぎると、子どもが養育者のやることをなすことをさかんに「真似る」ようになるのは、そこに養育者のようになりたいという「同一化」の心が働いているからである。このような現象が確かなものとなっていくためには、大切な人との快適で心地よい関係の基盤がぜひとも必要になる。そうした関係の中で、子どもの気持ちや意図といった目には見えないが、行動を駆り立てる上で不可欠な心が育まれていくことになる。

このように子どもが「真似る」相手に対して肯定的な感情を抱き、相手と一体になりたい、相手のようになりたいという憧れのような感情を抱くことが「学習する」ためにはぜひとも求められる。芸術の世界でも、習い事の世界でも、誰もが経験してきたことである。最初は「あの人のようになりたい」といった気持ちが「学習する」意欲を駆り立てるものなのである。

しかし、今日学校生活はもちろんのこと、乳幼児期を振り返っても、そうした「学習」意欲が育まれるための条件があまりにも貧困になってしまっていることに気付かされる。

乳幼児期における「学ぶ」ことをめぐる問題

乳幼児期の子どもと養育者の関係をつぶさに観察してきた経験から痛感するのは、子育てにあたって、子どもが今何にどのような関心を抱いているかということを大切にしながら接するという基本的な事柄があまりにも軽視されていることである。少しでも早い段階からできるようにと躍起になって、子どもに何でも与えて「させる」働きかけが驚くほどの勢いで広がっている。そのためのマニュアル本が横行し、養育者は子どもに何ができるかという結果だけに一喜一憂してしまう。

このような動向を促進させている背景には、実は今日の精神医学そのものの持つ問題が深く関係している。それは何かと言えば、子どもの発達の問題を「何がどのようにできないか」といった能力障碍に焦点を当てて考えてきたからである。発達になんらかの問題をもつ子どもを前にして、今や家庭でも学校でも医療現場でも、子どものどこにどのような能力の問題があるか、ということにばかり焦点を当て、肝心要の子どもの意欲や関心などといった「学ぶ」ための基盤として最も大切なことがないがしろにされている。

その元凶にあるのが、子どもばかり見て、養育者あるいは治療者と子どもとの関係を見ようとする視点が欠如していることである。

私が「関係」を見ることの重要性を痛感したのは、もとは自閉症研究においてであったが、乳幼児期早期の母子関係の問題を「アタッチメント」という多くの研究者が取り入れている行動科学的な立場を捨て、「甘え」という情動の動きに焦点を当てて観察したことによっている。

今日、発達障碍の理解において、子どもの気になる行動を症状や障碍にすぐに結びつけ、子どもの行動がどのような関係、あるいは文脈の中で起こったものかを考えようとしない。

「甘え」のアンビヴァレンスをめぐる問題

乳幼児期早期の発達障碍、特に自閉症スペクトラム

障碍を疑われる子どもたちと母親との関係を「甘え」の観点から観察していくと、子どもの気になる行動の大半は、「甘え」にまつわる行動であることがわかってくる。それはこれまで自閉症スペクトラム障碍に特徴的とされてきた行動の数々である。そのことが明らかとなったのは、特に乳幼児期早期、それも〇歳から一歳台のあいだの母子関係を「甘え」に焦点を当てて観察したことによっている。

そこで明らかになったのは、子どもたちは母親とのあいだで「甘えたくても甘えられない」状態にあるということである。それは母子関係においては、つぎのような子どもの動きで示される。

「母親が直接関わろうとすると子どもは回避的になるが、いざ母親がいなくなると心細い反応を示す。しかし、母親と再会する段になると再び回避的反応を示す」

そのため、両者のあいだでいつまでたっても好ましい関係の深まりが生まれず、逆に両者ともに強いフラストレーションを体験することによって、その関係は負の循環を生むことになる。このような母子関係の独特なありようを筆者は「関係からみた『甘え』のアンビヴァレンス」（以下「アンビヴァレンス」と記す）と称したが、そこで子どもたちは「甘えたくても甘えられない」心理状態を体験することになる。

二歳台以降になると、そうした「甘え」にまつわる行動が次第に見えづらくなり、いわゆる症状や障碍とされてきた行動のみが前景に出るようになる。

なぜそうなるかといえば、一歳台の子どもにとって「甘え」の体験が満足に得られなければ、安心感や基本的信頼感を育むことができず、常に強い不安と緊張に晒されるようになる。そうした心理状態は子どもたちにとっても耐え難い苦痛を与えるため、少しでも不安や緊張を和らげたり、紛らわそうとしたりする行動に出る。これまで発達障碍に代表的とされてきた症状や障碍の多くは、彼らの不安や緊張への対処行動であるということである。

このように考えていくと、われわれが彼らにどのような観点から治療あるいは援助の手を差し伸べたら良いかが見えてくる。

この「アンビヴァレンス」が強い子どもは「甘え」をはじめとする自分の欲求を相手に表出することに強いためらいと恐れを感じるようになる。このような状

態が持続すると、子どもの興味や関心を捉えることが困難となり、結果的に彼らへの働きかけは一方的なものになってしまう。

したがってわれわれがまず目指すべきことは、子どもたちの「甘え」（他者と関わりたい、相手をしてほしいといった欲求）をいかに感じ取り、それを引き出していくかということである。「甘え」を出せる関係において、子どもは自分を出す勇気が生まれるものである。「甘え」という同一化の心の働きを育むことを抜きに、学習の問題を考えることはできないからである。

おわりに

学業不振を主たる問題として浮かび上がる子どもたちなど、今日ほとんど見ることはできない。学校現場で教師の頭を悩ますのは、何をどのように教えたら良いかという本来の教師の役割を離れた、子どもの意欲や関心のあり方をどう理解し育んだら良いかという問題である。その背景には乳幼児期早期に本来は家庭で育まれるべき深刻な問題が深く関係している。それは何かといえば、子どもの行動の背後に動いている意欲、関心、興味などといった気持ちの動きをないがしろにしてきた子育てである。その最初の現れは養育者に向ける「甘え」という情動の動きで示されるものである。

養育者においても、治療現場の臨床医においても、これまで日本人の専売特許であったはずの「甘え」に対する感受性が著しく低下してしまっている。

発達障碍とはある特別な原因によって起こる障碍などではない。われわれの日常感覚でのものの見方や考え方が目の前の子どもを理解する上で最も大切なものである。生活世界を通して子どもを理解するという、本来の人間理解が失われてしまったつけはあまりにも大きい。

〔文献〕
小林隆児「関係障害臨床からみた学習とその困難さ」石川　元（編）『現代のエスプリ』三九八号（特集LD（学習障害）の臨床）二〇〇〇、一〇二―一一〇頁
小林隆児『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』ミネルヴァ書房、二〇一四